

韓国公州市における済民川の景観変化と地域活性化

山下亜紀郎

筑波大学生命環境系

本稿の目的は、韓国忠清南道公州市の旧市街地南部を対象に、同地区を流れる済民川の景観変化と住民による地域活性化の取り組みを明らかにし、近年の河川環境の創造が住民意識や地域活性化にもたらした意義について考察することである。1970年代までの済民川は、土手と柳並木に象徴される、洗濯・水遊びの場として住民に身近な存在であった。しかしながら1980年代になると、水質が悪化し流量も減少し、コンクリートの護岸で生活空間と隔てられた存在になった。2000年代以降、水質や流量が回復し、そして2011年から大規模な生態河川造成事業が実施され、現在の済民川の景観が形成された。この一連の景観変化の中で、地域住民がどの時代の済民川の景観を原風景として捉えているかが、現在の済民川に対する多様な評価に影響している。済民川における新しい景観の創出は、まずそれを肯定的に評価している人たちによる、さまざまな地域活性化の取り組みを呼び起こしたという意義がある。

キーワード：済民川、水辺景観、地域活性化、公州市

I はじめに

近年の低成長期に入った都市においては、中心市街地の再生・活性化のための方策の一つとして、河川や水路といった都市内水環境の復元や創造が注目されており、日本では東京・大阪といった大都市だけでなく、地方都市にもいくつかの事例がある（吉川，2005；日本建築学会編，2008）。

そのような事例を扱った研究として、例えば、金沢の市街地内を流れる用水路を取り上げた山下（2015）は、行政による修景事業が周辺住民の用水路への保全・活用意識を喚起し、それによって保全・活用されより魅力を増した水辺環境が、さらなる地域社会の活性化を促すという、「環境」－「社会」間の相乗効果がみられることを指摘した。松江市内の堀川を活かしたまちづくりを論じた鈴木・畔柳（2005）は、日常生活の中で住民と水辺がかかわりを保てる計画的配置を検討することが、水辺を活かしたまちづくりにおいて重要であると述べている。

韓国では、首都ソウルにおいて2003～2005年

に実施された清溪川復元事業が代表的な事例である。都心部の高架道路を撤去し暗渠であった清溪川を開渠化し、石積の河原や歩道を整備し、デザイン性に富んだ橋を架けるなどした一連の事業は、当時世界的にも注目され、ソウルの新しいシンボルとなった（財団法人リバーフロント整備センター編，2005；李，2007）。この事業を取り上げた研究事例として西名ほか（2008）は、清溪川の新しい水辺空間が、滞在者・通行者から景観面では肯定的に評価されていること、しかし利用者にとっての設備面では課題があることを明らかにした。一方、韓国のほかの都市における事例を研究したものとしては、金・畔柳（2006）が、釜山の温泉川における河川環境整備事業を対象に、事業の行われた水辺空間はオープンスペースとして散策や運動などの目的で地域住民によく利用されているものの、水と直接触れ合う親水空間としてはあまり意識されていないことを指摘した。

本稿も地域活性化という文脈の中で、上記の研究事例のように都市内水環境と地域住民との関係に着目する。具体的には、韓国の地方都市の一つ

である忠清南道公州市の旧市街地南部を対象に、同地区内を流れる済民川の景観変化と住民による地域活性化の取り組みを明らかにし、近年の河川環境の創造が住民意識や地域活性化にもたらした意義について考察することを、本稿の目的とする。

研究の手順と方法としては、まずⅡでは済民川の景観変化について、文献資料や現地住民への聞き取り調査から整理する。そして近年の大規模改修事業の内容について、公州市の担当者への聞き取り調査と資料収集に基づき紹介する。Ⅲでは、近年衰退傾向にあるとされている旧市街地南部の土地利用の実態を現地調査から把握する。Ⅳでは、済民川を意識したカフェ店主や地域活性化に取り組む地域住民への聞き取り調査から、その具体的な取り組み内容や、済民川との関わりおよび同川への意識について明らかにする。そして最後のⅤでは結論として、済民川の景観変化が地域活性化にもたらした意義について考察する。

Ⅱ 公州市と済民川の歴史

1. 公州市の位置と歴史

公州市は忠清南道の中東部に位置し、ソウルからは直線距離で約130km、高速バスで約2時間の距離にある(図1)。2015年時点の人口は約11万であり、同道では5番目の人口を有する都市である。韓国の四大河川の一つである錦江の中流にあたり、現在の市街地は、その錦江の両岸に広がっている。そのうち、支流である済民川の流れる南側がより古い市街地(旧市街地)であり、その中心としての公州山城市場が立地する。一方、錦江を挟んで北側がより新しい市街地(新市街地)であり、都市間交通の結節点としての公州総合バスターミナルが1990年代に設置された(図1)。

この公州にはかつて、475年から538年までの63年間、百済の首都が置かれていた。錦江の南岸に位置する公山城はその時代に築造された山

城であり、2015年に周辺の史跡とともにユネスコ世界文化遺産に登録された。百済滅亡後も公州には、各時代における忠清道の主要機関が置かれ



図1 研究対象地域の概要

ていた。忠清道が忠清北道と忠清南道に分離した1896年には、忠清南道の道庁が公州に設置された。ただし道庁はその後、1931年に大田に移転した。その後大田が直轄市（のちの広域市）となって忠清南道から分離したこともあって、2012年に道庁は、同道西部の洪城郡に移転している。

1931年まで公州にあった忠清南道庁は、現在の公州大学師範学部附属中・高校の位置にあり（図1）、その東側の済民川を挟んだ一帯までが、日本統治時代当時に中心市街地となっていた（図2）。特に道庁から東に延びる通りは、かつてこの地にあったとされる大通寺に通じることから「大通通り」と呼ばれ、繁華街となっていた。ただし、朝鮮半島各地で共通してみられる特徴として、日本統治時代当時の中心市街地は、主要な通りこそ広幅でかつ直線的に整備されたものの、それらに囲まれた街区の内側では自然発生的な狭く曲線的な路地を残しやすい（孫，2004）。この公州の大通通り沿いもそのような構造となっていることが、当時の地形図からもうかがえる（図2）。一方で、当時の中心市街地の北側において、方形に整えられた街区をもつ新規の市街地も整備され始めていることもわかる（図2）。

第二次世界大戦後の独立後、公州の市街地は錦江南側一帯の広い範囲へ拡大していき、先述した方形の街区の北側に公州山城市場も整備され、その周囲に市街地が発達した。これら1970年代までに形成された「旧市街地」に対して、その後、錦江北側の新官洞への公州大学校キャンパスの立地や、総合バスターミナルの移転に伴い、市街地は錦江を超え北側へとさらに拡大し、その一帯に「新市街地」が形成された。こうした市街地の拡大過程の中で、かつての中心市街地であった旧道庁周辺の旧市街地南部は現在、一見すると衰退傾向にある。Ⅲ、Ⅳではこの地区に着目して、土地利用の現状と地域活性化について述べる。

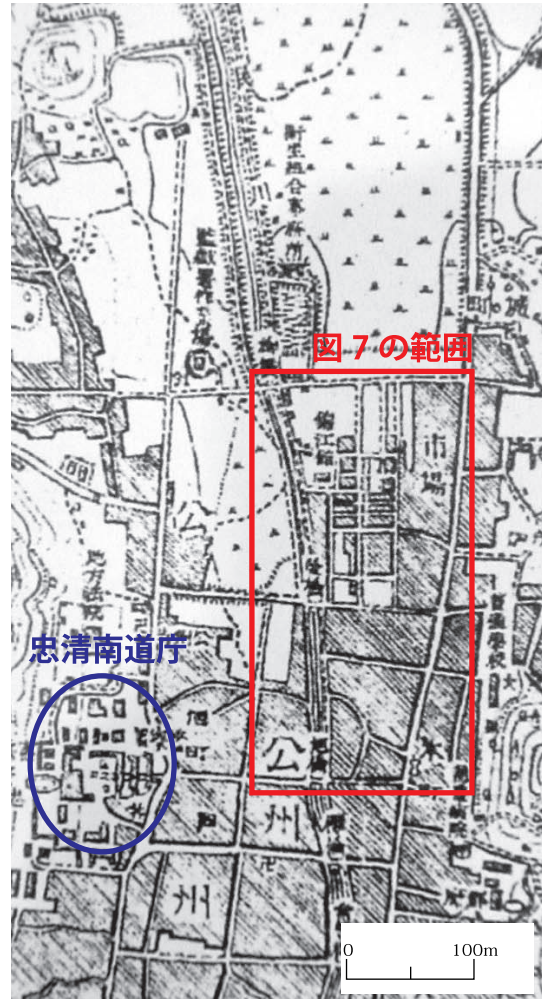


図2 1916年当時の忠清南道庁と公州市旧市街地南部

（陸地測量部発行2万5千分1地形図「公州」（1916年測量）の一部に加筆）

2. 済民川の変遷

公州市の旧市街地を貫流する済民川は、同市南部の金鶴洞に位置する人工貯水池を源流として北流し、錦城洞で錦江に合流する、流路延長約4.2kmの河川である（図1）。済民川の流路は、かつてはより曲流していたものの、1920年代には現在とほぼ同じになったとされている。当時の河岸は土手であり、土手の上では市場が開かれてい

た。また下流側の土手には柳並木も植えられていた。1970年代頃までの済民川は、洗濯や水遊び、魚取り等の場として住民の日常生活にとって身近な河川であった（図3）。柳並木は1970年代に一度幼木に植え替えられたが、1990年代になって河岸にも飲食店等が建ち並ぶようになる中で、次第に失われていった。

前後して1980年代になると、流域の市街地化によって済民川自体の河川環境も一変した。まず、生活用水源としての私設井戸が急増し地下水揚水量が増えたことで、済民川への地下水流出量が減り、季節によっては水のない枯れ川になってしまう状況になった。源流の貯水池は、公州市の水道水源として使われていたこともあって、済民川への放流量はほとんど無かった。一方、川沿いの市街地からの生活排水の流入量が増えたことで、済民川の水質は悪化した。当時、下水道は整備されていたものの合流式であり、大雨が降ると生活排水を含んだ汚水が済民川に一挙に流出し、悪臭が漂うこともあった。このように1980年代から1990年代前半頃が、済民川の環境がもっとも悪化した時代といえる。この頃には護岸もコンクリートや石造りのものになっており、済民川は住民の生活空間からは隔絶された存在となっていた。その一方で、旧市街地より上流側の公州市

庁周辺では、当時から済民川へ降りる階段が設置され、堤外地の川辺には歩道も整備されていたところもある。その歩道上では定期市が開かれるようになり、それは現在も続いている（図4）。

1990年代後半から2000年代に下水道を順次分流式に替えていったことで、生活排水の流入量が減少していき、済民川の水質は回復していった。一方、済民川の流量は依然として少ないままであったが、同じ頃、公州市の水道水源が錦江上流に建設されたダムに切り替わったことで、源流の貯水池は水道水源として利用されなくなった。また、2007年には錦江沿岸に公州下水処理場が新しく建設され、10,000m³/日の下水が処理されるようになった。これらに伴って、2007年からは下水処理場の処理水が4.8km離れた済民川源流の貯水池へ送水され、そこから済民川へ放流されるようになった。それ以降、済民川は年間通じて一定量の水が流れる河川になった。とはいえ、現在の流量の90%を、源流の貯水池に送水された下水処理水が占めている。

以上のような歴史的変遷を経て、さらに2011年から、公州市による大規模で全面的な済民川の改修事業である、済民川生態河川造成事業が始まることとなった。



図3 1930年代の済民川
（錦江文化フォーラム（2014）より引用）



図4 定期市の様子（2010年）
（錦江文化フォーラム（2014）より引用）

3. 済民川生態河川造成事業

済民川生態河川造成事業は、「歴史と文化が共存して自然と人間が調和した文化空間を造成」することを目的として、2011年8月に第一期事業が着工され、2014年12月に完了した。事業区間は公州市庁前の宣化橋から錦江との合流点までの下流側2.4kmであり、総事業費は270億ウォン（約27億円）であった。下流側を先に整備したのは、市街地内を流れる区間であり、その周囲の環境改善が急がれたことと、後述するように大雨時の氾濫が懸念されていたことによる。河川の両側に石積の河原、歩道、および高さ約4mの護岸を整備し、両側の護岸間の幅（川幅）は20mで統一した。河川に架かる既存の橋もすべて改修した。ただし大通橋だけは新しく架け替えた（図5）。こうした具体的な整備内容や構造物のデザイン等は、市の事業担当者らが、他地域で先行して実施された同様の事業を参考にしながら立案した。

この事業はもともと、治水目的の河川改修として計画され、それに生態環境の造成も兼ねたものであった。したがって、80年に1度の大雨が降っても氾濫しないようにシミュレーションされ、河川の断面や深さ等の構造が決定された。それに基

づき河道を従来よりも深くし、それまで2mに満たなかった護岸もより高いものに新しく造り変えられた（図6）。

一方、源流から宣化橋までの上流側は、2019年度着工を目指して現在計画中である。総事業費は225億ウォン（約22億円）であり、うち50%は国からの補助金を活用する。下流側と同様の河道改修に加え、親水公園1カ所、人工滝1カ所、水質浄化のための浅瀬7カ所の整備、および既存の橋6本の改修を実施する計画である。

そのほかに、源流の貯水池周辺では2008～2013年に、生態公園として自然庭園やビオトープ、キャンプ場や宿泊コテージなどが整備された。また、2018年度までの計画で水源林の整備も行われている。

これら一連の事業では、下流側が市街地、源流付近が観光地・保養地となる中で、市庁付近の中流区間はその両者をつなぐ漸移空間と位置付けられている。済民川の部分的な改修事業はこれまでも何度か行われてきたが、源流から最下流までの全区間を対象にこれほど大々的に実施される事業は、今回が初めてとのことである。



図5 済民川の景観と大通橋

奥に写っている橋が、新しく架け替えられた大通橋。
(2016年8月撮影)



図6 両側の護岸と済民川

(2017年3月撮影)

Ⅲ 公州市旧市街地南部の土地利用の現状

さて、このような改修事業が行われた済民川とその周辺地域の現状を把握するため、かつての中心部に近い、公州山城市場より南側の一帯を対象に、2017年3月に土地利用調査を実施した。

対象地域内のすべての建物について、その1階（地上）部分の用途を示した図7によると、まず対象地域の北縁および東縁の主要道路沿いに物販機能が建ち並んでいるのがわかる。これらの主要道路は、自動車交通のみならず歩行者通行量も多く、賑わいのある商業空間を形成している。この主要道路沿いも含め、全般的に対象地域の北半分（済民川右岸側）は、日本統治時代に中心商業地区となることを見越して街区が方形に整理された地区であり（図2）、主要道路から中に入っても、路地に沿って飲食店や各種サービス業が集積している。飲食店としては定食・粉食屋（麺類やトッポギ、のり巻き、おかゆなどを出す店）が最も多いが、肉料理屋や居酒屋もそれなりに立地しており、繁華街の様相を呈している。

一方で、対象地域の南半分および済民川左岸側は、依然としてかつての細い路地（図2）がそのまま残されている。ここは道庁があった時期の繁華街に相当する地区ではあるが、家屋等の建物も従来のまま更新されておらず、現在では商業施設も少なく空き店舗が多くみられ、衰退した地区となっている。

次に、対象地域の業種構成をみると（図8）、物販機能が全体の32%を占め、特に若者向けの衣料品店や化粧品店、アクセサリ店が多い。これは、対象地域の北側に隣接する公州山城市場が食料品・日用品および主婦向けの衣料品店に特化しているのと対照的である。このような対照性は、山下ほか（2016）による梁山市での調査でも指摘されている、いわゆる伝統的な在来市場とそれに隣

接する商業空間とで、客層や取扱商品に関してすみわけがなされている状況と類似している。

飲食店は全体の26%を占め、定食・粉食屋がもっとも多く、カフェ、肉料理屋、居酒屋がそれに次ぐ。そのうち、定食・粉食屋や肉料理屋が多いのは、韓国の市街地に共通する特徴であるといえるが、カフェが多いこと、特に商業施設が集積する一帯から離れた場所に立地していることは、注目に値する。サービス業は全体の18%を占め、美容室に次いで宿泊施設が多いのもこの地域の特徴である。一方で空き店舗も少なくなく、対象地域全体の18%を占めている。

Ⅳ 公州市旧市街地南部における地域活性化

1. カフェの新規出店

以上のような土地利用の現況のうち、ここでは対象地域の近年の変化を象徴するものとして、カフェの新規出店について取り上げたい。カフェは前述の通り、対象地域内の飲食店としては定食・粉食屋に次いで多く、14軒が立地する。なかでも特に、2010年代になって新規に出店されたカフェが目立ち、現在建設中のものもいくつかある。公州市では世界文化遺産登録への動きや済民川生態河川造成事業の着工とも相まって、「文化都市公州」としての地域活性化の取り組みが市民・民間レベルでも盛んになっており、その一例として、済民川を意識したようなカフェの新規出店を挙げることができる。

そのようなカフェの先駆けとなったのが、2012年6月に開店した「済民ネ」である。「ネ」とは韓国語で小川という意味であり、明らかに済民川を意識した店名である。店主は公州出身の50歳の女性で、20年以上ソウルや大田といった他都市に住んでいたが、夫の仕事の関係で2012年に公州へ戻ってきたのに伴い、このカフェを始めた。済民川沿いの3階建ての建物を購入し、1階



図7 公州市旧市街地南部における商店・事業所の分布（2017年）

（現地調査より作成）

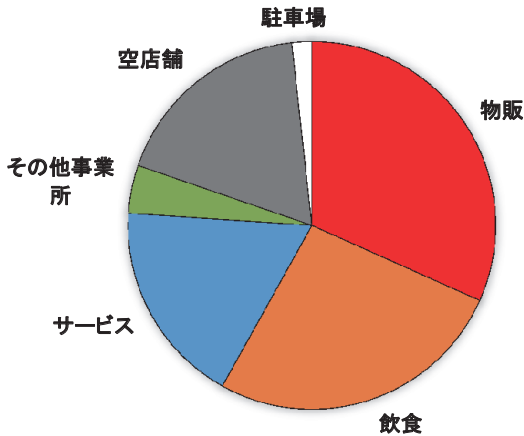


図8 公州市旧市街地南部における商店・事業所の業種構成 (2017年)

(現地調査より作成)

の中華料理店を改装してカフェにした。3階を店主夫妻の住居とし、2階は間貸ししている。大学の美術科出身の店主が自ら内装をデザインしており、店内には自身らによる絵画や工芸品などを展示している。

店主が子どものころの済民川はきれいな川であり、住民は水浴びをしたり、魚釣りをしたり、洗濯をしたりした。川沿いには柳並木もあった。しかしながら、1980年代に市街地化が進み、川も汚くなったと感じている。店主は当初、公州には戻りたくなかったそうであるが、現在では済民川と公州の街に愛着を持ち、済民川の河原の清掃活動を行ったり、地元の女性芸術家たちの組織（後述のボタンW）による文化的活動に参加したりして、その環境維持や文化創造による地域活性化に積極的に取り組んでいる。

同じく済民川沿いに位置する「BACH」は、2014年8月に開店したカフェである。オーナーは公州で別の仕事に就いており、生活拠点も必ずしも公州ではないため、別の雇用者に店長を任せている。オーナーはドイツ留学経験があり、留学中にドイツのカフェの、コーヒーを飲みながら本を

読んでゆっくり時間を過ごす雰囲気になれ、公州で同様の趣旨のカフェを開店させた。店名のBACHとは図9に示されるように、店の趣旨を表現したBooks and coffee & sandwichesというフレーズから文字を取ったものであるが、各単語の頭文字というわけでもなく、多少強引である。しかしながら、BACHとはドイツ語で「小川」という意味であり、ドイツ留学経験のあるオーナーが、店の側を流れる済民川を意識して命名したものではないかと考えられる。

BACHの店長（雇用者）は30歳代の男性であり、公州で生まれ育った。BACHの建物にはかつてゲームセンターと粉食屋が入居しており、店長は子どものころよく遊びに来たとのことである。しかし、その側を流れる済民川についての特別な意識はなく、近年改修事業が行われたことについても特に印象は無いとのことである。

2. 住民組織による文化的活動

空き店舗が目立ち衰退傾向にある旧市街地南部では、前述のカフェ店主らによる清掃活動のほかにも、住民主導による地域活性化のための文化的活動が行われている。その一つが、日本統治時代以前には繁華街であった旧道庁前の大通り沿い



図9 BACHの入口と看板

(2017年8月撮影)

(図7中の最南部)におけるアートギャラリーの開設である。ギャラリーの主人は、幼少期から公州在住の50歳代の女性であり、大通り沿いの空き家になった建物の2階を借りて1983年から絵画教室を開いていた。しかし公州にアートギャラリーが無いことを長年残念に思っており、自分でギャラリーを開きたいということで、絵画教室を閉じて同所をギャラリーに改装した。このギャラリーは2016年3月に開館し、地元作家らによる食器等の工芸品や絵画を展示・販売しているほか、カフェも併設している。主人によると、ギャラリーができることで、地域活性化や人の交流が盛んになることを期待しているとのことである。

主人にとっての幼少期の済民川は、柳並木と洗濯・水遊びの場というイメージであり、済民川を船が往来していたという記憶もある。主人の絵画の師がかつて、済民川と錦江の合流点付近を船が往来する絵を描いており、それに感銘を受けて自分も絵画を志すようになったという。また、1980年代までは川沿いに織物工場があって、染料で川が黄色く変色することもあったが、川で黄色い石を探す遊びをした思い出もある。

このギャラリーに併設するカフェの店長は、主人の息子(20歳代)が務めている。現在はギャラリーと同じ2階で営業しているが、将来的には賃料は高くなるものの、より多くの集客が見込める1階に移転したいという考えを持っている。

店長は学生時代のみソウル在住であったが、それ以外はずっと公州に住んでいる。店長が子どもの頃の済民川は、コンクリートや石造りの護岸ではあったが、階段があって川へ下りてよく遊んでいた。川沿いには軽食屋もあって、買い食いしながら遊んだ思い出がある。近年の改修事業で済民川は、むしろ他所で同様の改修事業が行われた河川と同じような景観になってしまい、個性が無くなりよそよそしくなったという印象を抱いてい

る。店長にとって済民川は、現在より子どもの頃の方が身近な存在であったと感じている。

一方、このギャラリーの主人を中心に、公州の文化を守り育てるために結成された組織が「パッタンW」である。2013年の結成時のメンバーは公州在住の30～50歳代の女性芸術家たち10名ほどであった。芸術家といっても、必ずしもプロの画家や陶芸家だけではなく、趣味として創作する主婦なども含まれている。結成時のメンバーが公州内外の同世代の女性たちに声をかけて新メンバーを加えたため、現在ではメンバーは25名ほどに増えている。現在のメンバーのうち公州出身者は半分強とのことである。組織名称のパッタンとは韓国語で基盤や土台を意味しており、WはWomanの頭文字である。2014年から公州市庁や公州市立図書館で毎年展示会を開いており、公州市からの補助金を得て、作品集も年に1度出版している。その最初である2014年のテーマが、済民川であった。その理由は、メンバーが公州でもっとも大切な存在と考えたからであり、生態河川造成事業も実施されていたからである。また、2014年の第1回展示会の前に、済民川の写真と絵画を並べた展示会を開いており、それが好評だったことも、最初のテーマを済民川にした理由である。その他にも、前述のアートギャラリーで展示会を開いたり、大田等の他都市へ出かけて行って展示会を開催したりしている。パッタンWは、自分たちの活動を通じて、高齢化が進む公州に若い世代を呼び戻し、新しい文化が創造されることを望んでいる。また、公州市民に自分たちの作品を見せることで、市民の公州への意識や愛着が高まることも期待している。

V おわりに

本稿では、衰退したかつての中心部である公州市旧市街地南部を対象に、済民川の景観変化およ

び土地利用の現況、生態河川造成事業を契機としたさまざまな地域活性化の取り組みについて明らかにした。最後に結論として、それらの調査結果を通してみえる、済民川の景観に対する住民意識の多様性と、景観変化がもたらした地域活性化への意義について考察したい。

1970年代までの済民川は、土手と柳並木に象徴される、洗濯・水遊びの場として住民に身近な存在であった。しかし、1980年代になると水質が悪化し流量も減少し、コンクリートや石積みの護岸で生活空間と隔てられた存在になった。2000年代以降、水質や流量が回復し、そして2011年から大規模な生態河川造成事業が実施され、現在の済民川の景観が形成された。

この一連の景観変化の中で、地域住民がどの時代の済民川の景観を原風景として捉えているかが、現在の済民川への意識や地域活性化への主体性の違いとなって表出しているといえる。その中で、特に柳並木に象徴される古き良き済民川を原風景に持ち、その後の環境が悪化した済民川を目の当たりにしている50歳代以上の世代が、景観整備の行われた現在の済民川にもっとも愛着を持ち、地域活性化にも熱心に取り組んでいる。すなわち、一度悪くなったものが再び良くなったと捉えているからこそ、現在の景観を肯定的に評価しているといえる。その一方で、1980～90年代のコンクリートや石積み護岸の済民川を原風景に持つ世代の中には、現在の改修された済民川の景観に無関心な住民もいる。また、他都市での居住経験がある若い世代の中には、かつて自らの遊び場だった済民川が、新しいけれど画一的な景観に変わってしまったと、違和感を感じる住民もいる。

このように住民意識が多様な中で、現在の済民川の景観はどう評価されるのであろうか。そもそも生態河川造成事業において、いつの時代のどのような済民川の景観が理想として目指されたの

であろうか。その答えは、いつの時代とも異なる、伝統的なようでありながら現代的コンセプトや価値観に基づいて造られた景観が、新しく現出したということになろう。生態河川造成事業によって創られた済民川の景観は、確かに自然と人間の調和に配慮した構造になっているものの、同様の事業が行われた他所の都市河川とさほど変わらないものともいえる。

そうした新しく創出された景観への住民の評価が、住民個々のライフヒストリーにおける当該環境との関わり方に依拠するのであるとすれば、その評価が肯定的であったり、否定的であったり、無関心であったりと多様なのは当然といえよう。しかしながら一つ確かなのは、済民川における新しい景観の創出が、まずそれを肯定的に評価している人たちによるさまざまな地域活性化の取り組みを呼び起こしたということである。こうした地域活性化が今後も継続し発展していくためには、次の段階として、否定的あるいは無関心な住民をいかに巻き込むかが重要であろう。景観の価値や評価というのは不変のものではなく、時代とともに、そして周囲の社会的・文化的環境の変化とともに変わっていくものである。現在の地域活性化の取り組みが今後さらに発展していくことで、新しく創出された済民川の景観の価値や意義もさらに高まっていくものと考えられる。

【付記】

現地調査において、公州市内のカフェや、地域活性化に取り組む住民の方々、公州市庁の関係部署の方には、聞き取り調査に快く応じていただきました。また、公州大学の鄭 還泳教授および仁川大学の李 虎相助教授には、調査先の調整や調査方法についてご支援・ご助言をいただきました。仁川大学校学生の方李 瑟兒氏には土地利用調査にご協力をいただきました。韓国語資料の翻訳は、筑波大学大学院生の金 延景氏にお願いしました。韓国語要旨の作成は、中山大学の全 志英研究員にお願いしました。以上、記して謝意を表しま

す。本稿の骨子は、2017年度中四国都市学会大会・愛媛地理学会大会（愛媛大学）において発表した。また本稿の作成にあたっては、科学研究費補助金基盤研究(B)「低成長期における地方都市再生に向けた韓国の都市構造に関する研究」（代表者：兼子 純，課題番号：15H05168）の一部を使用した。

文 献

- 李 明博著，屋良朝建訳（2007）：『都市伝説ソウル大改造』マネジメント社。
- 金 那英・畔柳昭雄（2006）：都市河川のオープンスペースに見られる地域住民の親水行動に関する研究。ランドスケープ研究，69(5)，747-750。
- 財団法人リバーフロント整備センター編（2005）：『川からの都市再生－世界の先進事例から－』技報堂出版。
- 鈴木尚美子・畔柳昭雄（2005）：水網都市におけるオープンスペースの空間特性に関する研究。ランドスケープ研究，68(5)，909-912。

- 孫 禎睦著，西垣安比古・市岡実幸・李 終姫訳（2004）：『日本統治下朝鮮都市計画史研究』柏書房。
- 西名大作・村川三郎・孟 廷宣（2008）：韓国清溪川における河川利用行動特性に関する調査研究。日本建築学会中国支部研究報告集，31。
- 日本建築学会編（2008）：『水辺のまちづくり－住民参加の親水デザイン－』技報堂出版。
- 山下亜紀郎（2015）：都市の水辺景観と都市住民の生活との係わり。山下亜紀郎『水環境問題の地域的諸相』143-178，古今書院。
- 山下亜紀郎・駒木伸比古・兼子 純・山元貴継・橋本 暁子・全 志英・李 虎相（2016）：韓国梁山市における新旧市街地の土地利用比較。地理情報システム学会講演論文集，25。
- 吉川勝秀（2005）：水辺からの都市再生の事例－日本と世界の先進的あるいは萌芽的事例－。財団法人リバーフロント整備センター編『川からの都市再生－世界の先進事例から－』80-109，技報堂出版。
- 錦江文化フォーラム（2014）：『済民川－我らが守るべき公州の文化⑨－』錦江文化フォーラム。（韓国語）

한국 공주시 제민천의 경관 변화와 지역활성화

야마시타 아키오

쓰쿠바대학교 생명환경계열

본 연구의 목적은 충청남도 공주시의 구시가지 남부 지역을 사례지역으로 이 지역을 흐르는 제민천의 경관 변화와 지역활성화를 위한 지역주민의 노력을 구명하고, 최근의 하천환경 조성이 주민의식과 지역활성화에 미친 의의에 관해서 고찰하고자 한다. 1970년대까지 제방과 버드나무가 제민천의 상징처럼 인식되었고, 빨래터와 물놀이 장소로서 주민들에게 친근한 장소였다. 그러나 1980년대로 접어들면서 수질이 악화되었고 유량도 감소하였으며, 콘크리트 기슭막이로 생활공간과 멀어지게 되었다. 2000년대 이후 수질과 유량이 회복되고 2011년부터 대규모 생태하천 조성사업이 시행되면서 현재의 제민천 경관이 형성되었다. 이러한 일련의 경관 변화를 겪으면서 지역주민들이 어느 시대의 제민천 경관을 본래의 모습으로 인식하고 있는가에 따라서 현재의 제민천에 대한 다양한 평가에 영향을 미치고 있다. 제민천의 새로운 경관 창출은 무엇보다도 그것을 긍정적으로 평가하는 사람들에 의해 다양한 지역활성화의 노력을 불러일으켰다는데 의의가 있다.

키워드 : 제민천, 수변경관, 지역활성화, 공주시